

当院における肺炎球菌性肺炎の臨床的検討

¹ 済生会 山形済生病院 内科

○土田 文宏¹、荒 友香¹、西塚 碧¹、盛田 麻美¹、
渡邊 麻莉¹、佐藤 千紗¹、鈴木 博貴¹、武田 弘明¹

【背景・目的】市中肺炎において肺炎球菌は、病原性が強く肺炎起因菌として最も頻回に分離される細菌の1つである。今回我々は、当院において肺炎球菌性肺炎症例の臨床的な検討を行った。また、細菌性肺炎に対する防御機構に脂肪細胞より放出されるアディポサイトカインであるレプチンが関与する事がマウスの実験でいわれている。レプチンと炎症性サイトカインを測定し基礎的検討を行った。【対象・方法】2007年度から2011年度まで喀痰培養検査、尿中肺炎球菌抗原検査陽性症例で臨床的に肺炎球菌性肺炎と考えられた症例を対象とした。日本呼吸器学会のガイドラインに従い重症度分類し検討した。治療効果は死亡例を除いた例での治療期間(抗菌薬使用期間)として検討した。更に70歳以上の高齢者に限りCAP群とNHCAP群のカテゴリーにおいての相違を検討した。また、レプチンのIL6等の炎症性サイトカインとの関与の検討を行った。【結果】肺炎球菌性肺炎と考えられた症例は119例(男性64例、女性55例)。年齢は、24~97歳(平均68.9歳)。重症以上の症例は70歳以上の高齢者が多くを占めていた。治療効果に及ぼす因子としては、年齢とalb値であった。70歳以上の高齢者は、63例でCAP群33例とNHCAP群30例であった。高齢者(>70歳以上)の肺炎球菌性肺炎のNHCAP群とCAP群では、発症時点での重症度がNHCAP群で高く、栄養状態と肺炎球菌の耐性化に差はなかった。治療効果はNHCAP群で劣っていた。免疫応答はNHCAP群ではIL6の上昇に比してCRPの反応が低値であった。レプチンと炎症性サイトカインの関連は、BMI>25に限りIL6との相関がみられた。【結論】肺炎球菌性肺炎の治療で問題となるのは、特に年齢と栄養状態と考えられた。同じ高齢者においてもCAP群とNHCAP群で重症度、治療効果に差がみられたが菌の耐性化では差がなく、肺炎球菌性肺炎のCAP群とNHCAP群では菌の耐性化以外の因子が関わっている事が推察された。

2011年流行時における *Mycoplasma pneumoniae* 感染症による入院患者の臨床的検討

¹ 国立感染症研究所 細菌第二部、² 国立感染症研究所 感染症情報センター

○鈴木 里和¹、堀野 敦子¹、安井 良則²、谷口 清州²、
柴山 恵吾¹

【背景】2011年はマイコプラズマ肺炎の大きな流行年であったと同時に、*Mycoplasma pneumoniae*のマクロライド耐性化も報じられた。そこで *M. pneumoniae* 感染症による入院患者の臨床像の検討と初期治療抗菌薬による予後の比較を行った。【方法】対象は、2011年6月から12月に血清抗体価または病原体の核酸検出により、*M. pneumoniae* 感染症と診断され入院した患者とし、臨床情報は、年齢・性別、基礎疾患、検査結果、治療経過等を統一した調査票にて収集した。【結果】14都道府県47医療機関より763例の臨床情報が収集された。平均年齢は7.8歳で15歳以下の小児が症例の96.3%を占めた。酸素吸入療法は190例(24.9%)、副腎皮質ホルモン(ステロイド)の内服または静注による全身投与は180例(23.6%)に対して行われていた。症例の有熱期間は平均7.0日、発症から退院までの罹病期間は平均12.4日であり、人工呼吸器による補助換気を要した症例や死亡例は無かった。外来治療を経ずに入院となった176例について、予後を初期治療抗菌薬ごとにβ-ラクタム単剤治療群と比較した場合、ミノサイクリン治療群の罹病期間はβ-ラクタム単剤治療群より2.5日(95%信頼区間: 0.7~4.3日, $p < 0.05$)有意に短縮していたが、マクロライド治療群では有意差は認めなかった。【考察】本研究で収集された症例においては、重篤な合併症や死亡例はなく、臨床経過についても過去の報告との大きな乖離は認めなかった。一方、*M. pneumoniae* 感染症の第一選択薬であるマクロライドの臨床効果が低下していることが示され、その要因として、近年増加しているマクロライド耐性菌の蔓延が考えられた。【謝辞】本研究の実施にあたり症例をご提供いただいた研究協力医療機関の諸先生方に深く感謝いたします。【会員外協力者】国立感染症研究所細菌第二部 見理剛 佐々木裕子